I-34

外国人建築家による日本の伝統の解釈に関する研究
～アントニン・レーモンドの五原則に示された日本の建築の原理～
Study on views of Japanese traditional architecture by foreigner architects
- Principles of Japanese architecture in Antonin Raymond's idea of five points of architecture -

○小川　翼[1]　　田所　辰之助[2]
*Tsubasa Ogawa[1]　Shinnosuke Tadokoro

In this study, we hope to make clear whether the foreign architects captured from any point of view of the traditional architecture of Japan, was trying to apply in creative activities and what the emphasis.
Antonin Raymond there was a strong interest in traditional architecture of Japan, was consolidating its construction outlook in five principles, which consists of "simplicity," "natural," and "economy", "straightforward," and "integrity". To verify the various initiatives in the design activities since the visit to Japan, to analyze the evolution of perceptions of Raymond of Japanese tradition.

0. 研究目的・方法

本研究では、外国人建築家が日本の伝統的建築をどのような観点から捉え、何を重視して創作活動に応用しようとしていたのかを明らかにしたい。

日本の伝統的建築に強い関心のあったアントニン・レーモンド（Antonin Raymond, 1888 -1976 ）は、「単純性」「自然性」「経済性」「直截性」「誠実性」からなる五原則にその建築観を集約させた。来日してからの設計活動におけるさまざまな取り組みを検証し、日本の伝統に対するレーモンドの捉え方の変遷を分析する。

1. 日本人の生活観に対するレーモンドの理解

レーモンドは訪日した際に日本の町並を望み、日本人の人間性を自然とともにあるものと捉えており、日本人が建築、主に住宅に求める開放性はこの自然とともにあろうとする日本人の古くからの自然を愛しむ人間性独自のものであると考えている。これをレーモンドはその後の建築に多く表している。東京麻布に木造によって建てられたレーモンド自邸では柱芯を外した引き戸やガラス戸が外にもち出された芯外しの手法から、障子や戸を自由に滑り開けることで建築内部は閉鎖的ではなく自然に密接した非常に開放的な空間としている。これにより庭を居住空間の一部とする生活スタイルをとってレーモンドは暮らしていた。

またレーモンドは日本における古くからの習慣を建築に取り込むことにも重きを置いていた。後藤新平小爵邸という住宅はレーモンドにとって興味深い日本人の習慣を知ることにも繋がった。そのひとつが「鬼門」であり、鬼門は敷地の北東の隅、鬼の精がたむろする所とされ、日本人は敷地の北東に設備部分や便所を設置しない。これを解決するために北東に面して建築を配置し、主要な要素とそうでない要素の関係を一緒にすることを行った。他にも首吊りを連想させることから寝室の天井の梁は露わにしない、また死体の頭を北に向けるという習慣から、縁起を考え北にはベッドの頭を向けないという工夫がなされた。

左　図 1. 麻布自邸
上　図 2. 後藤新平小爵邸

2. 建築の構造形式への関心

2-1. 打放しコンクリートの実験

レーモンドは打放しコンクリートの建築において自然の持つ美しさと経済性と関係に重きを置いている。特に霊南坂の自邸は最初の成功作品として挙げて

1:日大理工・学部・建築　Architecture , CST. , Nihon-U
2:日大理工・教員・建築　Architecture , CST. , Nihon-U

いる。コンクリートの打ち放しであるため、一目では「和」を感じるような点は無いように思えるが、この建築には幾つかの日本からインスピレーションを受けた手法が用いられている。各部屋には個々の庭を設け、南向きで適切な方に向けられていた。窓にひさしを取り付け、冬には陽差しを入れ夏には直接光線避けるようにした。またこの自邸には装飾的要素を取り入れていない。レーモンド自身「唯一の装飾は構造そのもの」と述べており、ここに後の五原則と呼ばれる「直截性」や「自然性」が現れている。また代表的なコンクリート建築として群馬音楽センターが挙げられる。この建築は折半コンクリート構造の建築であり、薄いコンクリート板がボール紙のように折りたたまれ、壁と屋根の構造として用いている。垂直の折版は壁に使われ屋根の高さまであり、その壁の同一面が水平に流れて折版の屋根構造を作っている。また劇場としての機能と配置が複雑であったため、レーモンドは複雑な機能を打放しコンクリートや木といった一般的で単純な材料を使用し、統一することで内外を調和させる一方で細部デザインにも全体的な統制をとるというアプローチを行った。

図 3. 霊南坂の自邸

図 4. 群馬音楽センター

2-2. 木造作品にみる架構形式の特徴

レーモンドは構造上無意味な、虚偽の柱や梁を使用することを厳しく禁じていた。日本では、柱は柱としての構造的な役割をもちながら、同時に造形表現の一要素でもある。これが日本建築の特徴であると彼は理解していた。そのためレーモンドの建築における構造はどれも強い造形表現が与えられており、葉山海の家という作品では、大きな軒の張り出しと海を望むことのできるバルコニーを持ち、それを支える傾斜が特徴的な柱が設けられている。海を眺めるということを目的としたバルコニーを支えることに重きをおいた構造とその表現である。この他にも木造建築は幾つか挙げられるが、それぞれの用途や規模など、その建築に適した構造手法を用いることでレーモンドは経済的であり、造形表現としても意味のある木造建築を目指していた。そのため、一つ一つの建築で構造形式に違いが見られることがある。

図 5. 葉山海の家

3. 五原則に示された日本の建築の原理

レーモンドは自然性を日本人の人間性や生活スタイルから汲み取った。自然の一部としてあり続けようとする日本人の人間性、それを内部空間の開放性もしくは外部空間の取り入れなどで行った。時にそれは木造建築だけでなく、コンクリート造でも共通している。また古くから慣習化されてきた伝統や風習を、西洋建築と和風建築との交わりの際に重きを置くことで、日本建築としての本質を残すことが出来ると考えており、この考えは誠実性へと収斂されていったのではないのだろうか。

打放しコンクリート作品に対する取り組みに単純性、直截性、経済性へと集約されていく要点がある。レーモンドは打放しコンクリートの粗々しい手の及んでいない部分に美しさを感じ、自然との在り方に共通点を見出している。これは自然であることが美しいとする単純性や直截性へとつながり、また、レーモンドの構造に対する取り組みはコンクリート、木造のどちらにも無駄のない合理性の配慮がある。どちらにおいてもその建築に最適な構造手法を研究し用いる。それが結果として効率がよく経済的な構造に繋がるのである。

4. まとめ

レーモンドの打ち放しコンクリートの作品、および木造作品の造形的特徴のなかから、日本の伝統に対する解釈を読み取った。「単純性」「自然性」「経済性」「直截性」「誠実性」の五原則に集約されるレーモンドの建築観の背景には、近代建築の合理性に対する配慮があった。日本の伝統的建築のなかから、モダニズムの機能的合理性とは異なった建築の原理が学ばれていったのである。

参考文献
アントニン・レーモンド『自伝アントニン・レーモンド』鹿島出会, 2007 年/アントニン・レーモンド『私と日本建築』鹿島出版会, 1967 年/アントニン＆ノエミレーモンド『建築と暮らしの手作りモダン』美術館連絡協会, 2007 年/『JA—The Japan architect ANTONIN RAYMOND』新建築社, 1999 年春号/『ニッポンのモダニズム建築 100 Bilingual issue Japanese』マガジンハウス, 2008 年

図版出典
『自伝アントニン・レーモンド』P76
『建築と暮らしの手作りモダン』P63, 70
『JA—The Japan architect ANTONIN RAYMOND』P25, 33,